

## なりそこねた女

池田 祐子

ワイルド作品における「新しい女」、就業婦人としての女優を考察する。19世紀末の女優の席卷は、1860年代「当世風の女の子」たちがパリの高級娼婦の衣装を真似ることで、美德より美装を支持したことに始まる。華やかな女優たちはファッション・リーダーになり、高級娼婦と同等に見なされていた時代の偏見を時に受けつつも、解放的なドレスで合理服運動に一役買うなどして、文化に影響を及ぼし始めた。1894年にHavelock Ellisは次のような見解を発表している。

There is at least one art in which women may be said not merely to rival but naturally excel men: this is the art of acting. . . . In women mental processes are usually more rapid than in men; they have also an emotional explosiveness much more marked than men possesses, and more easily within call. At the same time the circumstances of women's social life have usually favoured a high degree of flexibility and adaptability as regards behaviour; . . . (qtd in Stokes, 7)

世論に後押しされるように、イングランドとウェールズで1861年に891人だった女優の数は1891年には3696人に増加する。● *The Picture of Dorian Gray* (1891, 以下 *Dorian Gray* と省略)で、女優に恋したドリアンが“common-place debut”(47)と揶揄されるように、女優は労働者階級の少女にとって社会階級的な“transformation”(Auerbach 33)の手段となる魅惑の職でもあった。*Woman's World* の“Dramatic Singing as a Career for Women”(1890)では、“Among the vocations which women are by general consent allowed to claim as their own, dramatic singing stands conspicuously first.” (Glen 491)とある。著者は劇中歌唱を観衆と喜びを共有しあえる職業であると擁護し、コスモポリタンとして才能を磨く必要性を説く。

しかし大衆の喜びに従事する女優は、化粧を施し匿名性を失い男性の視線の前に自らを晒すことを生業とする。その精神性は「家庭の天使」の対極にあると、女性の憤み深い性を擁護する者たちの非難を受けた。● Frederick Wedmore は“*To Nancy*”(1896)、続編“*The Deterioration of Nancy*”(1896)で、女優として開花するナ

ンシーがプライバシーを失いパブリシティ獲得に貪欲になる様子と、見守るロイヤルアカデミーの画家 Mr. Ashton の嫌悪感を対照的に描いた。彼女の変貌を画家は「墮落」と呼ぶ。画家は化粧した女優を“monstrously refined”(32)と称えるが、この時代女優に纏わる描写に“monster”を連想させる語は多い。Henry James(1843-1916)は小説 *The Tragic Muse*(1890)の中でパリの女優の模倣能力に対するイギリス人男性の嫌悪を描いているが、ここで女優はまさしく“monster”(832)に例えられている。*Dorian Gray* では劇場支配人が“monster”(48)と揶揄され、女優の住む街は“grey, monstrous London of ours”(47)と表現される。ゲイツは19世紀のパリやロンドンに「人生を表す隠喩、秘密と腐敗の暗い迷路と見なし、脅威に満ちて予想しがたいもの、終局的には不可知のもの」(89)であったと指摘する。化粧物のような街と、そこを住処とする変幻自在の“public woman”(女優と娼婦の両方を意味する)は容易に結び付けられたのだ。

怪物や墮落の概念を呼び覚ます女優はファム・ファタールの様相を帯びる。ドリアンは Sibyl に出会う晩、大気中に“exquisite poison”(47)を感じ、“passion for sensations”(47)に胸を熱くしながら、“eastward”(47)へ歩いていく。彼は“myriads of people, its sordid sinners, and its splendid sins”(47)で飽和寸前のロンドンという怪物の腹の中で、醜いユダヤ人の「怪物」に誘われ、彼の最初の罪の場となる運命的な女優に出会う。愛が冷めたドリアンの目に彼女の住む街は「しわがれた声で不快な笑い声を発する女」や「奇形の(monstrous)猿のような酔っ払い」(60)の裏通りとして映る。シビルは夜のロンドンを住処とする女優の姿でいるときに限り、ドリアンと劇場内での逢瀬を許されるが、彼女は永遠に一個の女性にはならず、一貫してドリアンの「快樂」を引き起こすだけの女優という装置である。ドリアンは彼女を生まれながらの芸術家と呼び、ただもう美というだけで目頭が熱くなり、滲み出る涙で目がかすんでその姿が見えなくなるほど見とれ、フルートか遠くで聞こえるオーボエのように響く声に心をかき乱されたと言語。これらの賛辞は女優が芸術のいくつかの形態—美術・音楽・文学—を模倣した芸術であることを示唆する。しかし一般に女優の模倣性は男性の創造性に劣るとされ、否定的に取られる傾向にあった。先のジェイムズの物語でイギリス人男性が嫌悪するのは、観客の理想の女性があたかも役者自身の本質であるかのように演じる女優の擬態能力である。女優は「怪物」、「女版体操選手」、果ては「いかさま師」と罵られる(James 832)。しかしドリアンは違う。シビルを世界中に知らしめ、彼女が崇拜されることを熱望する。妻を公的な存在にする夢はヘンリーにも理解できず、「まさか君は自分の妻に芝居をさせたくなからう」と言っている。妻を大衆化し

で悦に入るドリアンは「新しい女」の対になる「デカダン」といえよう。Dijkstraは「新しい女」とその勇ましさを恍惚と眺めながら愉悦に浸る「デカダン」を、新しい夫婦像だと嘲笑する世論があったと伝える。ドリアンが女優を未来の妻に選んだのは時代の流れともいえる。

ドリアン「新しい男」ぶりに反して、シビルには引退こそが幸福な結末を意味する。小綺麗な客間に妻として迎え入れられる可能性が出てきた少女にとって、ステージや模倣は軽蔑すべき対象に変ずる。“I hate stage. I might mimic a passion that I do not feel, but I cannot mimic one that burns me like fire.”(72) 生活のため劇場に繋がれてきた女優は、その鎖を貴族の紳士に委ねることで、新たな主人に統治されることを望むのだ。“We don't want him[Isac] any more, mother. Prince Charming rules life for us now.”(55) 女性は男性に隷属するものとするシビルは、“I shudder at the thought of being free”(60)と告白する。女優業に就きつつも「新しい女」の精神性を有していないシビルは、サロメのように社会的制裁として命を奪われるのではなく、ヴィクトリア朝の恋に破れた女がとる最も一般的な手段、自殺による最期を迎える。

シビルは「デカダンの花嫁」たる外観にヴィクトリア朝女性の標準的価値観を有する。現実に「新しい女」像の広まりはイブセン劇の Elizabeth Robins やサロメの候補者 Sarah Bernhardt や Eleonora Duse ら外国の女優に負うところが大きい。ワイルド作品においてもヴィクトリア朝的イデオロギーの脅威となる「新しい女」は外部から侵略してくる傾向にある。ヴィクトリア朝生まれの女優シビル・ヴェインは男装でジェンダーの境を越えても「新しい女」になるには役不足だったのである。

### 引用文献

- Auerbach, Nina. *Ellen Terry: Player in Her Time*. Philadelphia: U of Philadelphia P, 1987.
- Dijkstra, Bram. *Idols of Perversity: Fantasies of Feminine Evil in Fin-de-Siècle Culture*. New York: Oxford UP, 1986.
- Glen, Annie. “Dramatic Singing as a Career for Women.” *Woman's World* 3 (1890):491-93.
- Stokes, John. Michael R. Booth, and Susan Bassnett. *Bernhardt, Terry, Duse: The Actress in Her Time*. Cambridge: Cambridge UP, 1988.
- Wedmore, Frederick. “To Nancy.” *Savoy* 1(1896):31-41.
- . “The Deterioration of Nancy.” *Savoy* 2 (1896): 99-108.
- Wilde, Oscar. *Complete Works of Oscar Wilde*. Glasgow: Harper, 1994.
- バーバラ・T・グイツ。『世紀末自殺考：ヴィクトリア朝文化史』桂文子他訳。東京：英宝社、1999。